

## [成果情報名]輪ぎく「精の一世」の秋季出荷安定栽培法

[要約]再電照は、総苞形成後期～小花原基形成前期の間に開始し、3日間行う。基肥窒素量は10kg/10a、分施は定植後30日目頃～花芽分化期までに2回に分けて5kg/10aずつ施用する。シェード期間は病害、再電照中は害虫侵入に注意する。防除条件下では再電照や窒素施肥による病害虫への影響は小さい。

[キーワード]花芽分化、再電照、窒素施肥法、病害虫

[代表連絡先]電話 0125-28-2800

[研究所名]道総研花・野菜技術センター・研究部・花き野菜グループ

---

### [背景・ねらい]

無側枝性が強い「精の一世」は、従来の品種よりも省力的で、市場からの評価も高いため作付面積が広がってきた。産地では、府県用の栽培マニュアルを参考にしているが、開花期のずれや奇形花等の障害発生が産地で問題となった。そこで、産地からは本品種に対応した再電照などの栽培管理法、効果的な肥培管理法および病害虫対策の各技術が要望された。そこで、「精の一世」の秋季出荷作型において、切り花品質の向上が期待できる再電照技術（短日処理期間中に一時的に行う電照）、安定生産のための窒素施肥法および病害虫対策を確立する。

### [成果の内容・特徴]

1. 再電照を、総苞形成後期から小花原基形成前期の間に開始し、暗期の中心の時間帯に3～5時間点灯させ、3～5日間行うことで、無処理区より小花数が増加し、管状花率を減少させ、切り花の品質が向上する（図1、2）。
2. 再電照により花首は伸びるが、矮化剤処理を行うと伸長抑制に効果がある。
3. 「精の一世」は初期生育が旺盛で、乾物生長速度は生育前半に「岩の白扇」より高いが、後半に低下し、花芽分化後に窒素分施しても窒素含有率のみが高まり窒素乾物生産効率が低下する（データ略）。
4. 土壌硝酸態Nが「北海道施肥ガイド」における水準Ⅱの時、分施窒素を定植後30日目頃～花芽分化期までに5kg/10aずつ2回施用すると、定植後30日目頃に一括して施用するより生育が良好である（表1）。
5. 本作型における主要病害は白さび病と灰色かび病であり、シェード期間中は多湿条件により発病リスクが高まるため注意を要する。現地慣行防除条件下ではいずれの病害も発生程度は軽微である。
6. 再電照処理は病害の発生に影響しない。分施2回処理により生育後半に灰色かび病が発病しやすくなるが、防除条件下ではその影響は小さく、生育終盤までの薬剤散布で対応可能である。
7. 主要害虫はハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類で、発生状況は従来品種と同様と考えられる。現地で発生した茎頂部のしおれ症状はカスミカメムシ類の吸汁が原因で、殺虫剤散布で防除可能と考えられる。
8. 再電照期間に蛾の成虫の侵入が増えるため、その後の発生動向に注意を要する。
9. 以上より、図3に「精の一世」の秋季出荷作型の安定栽培に向けた再電照、施肥、病害虫の留意点を示す。

### [普及のための参考情報]

1. 「精の一世」の秋季出荷作型の資料とする。
2. 短日処理（シェード）開始後7日目頃から花芽分化過程を確認し、再電照の開始を判断する。

